

長沼公彦・元山梨県農政部長

◇県幹部から代議士秘書へ転進

「住民現場と政治の距離は遠過ぎる。問題が大きくなる前に政治へ意見具申できる仕事をしなかった」一。こう話すのは今春、農政部長や代表監査委員まで務めた山梨県を退職後、代議士秘書へ転進し庁内を驚かせた長沼公彦さん（ながぬま・きみひこ＝60）。「飲酒運転の厳罰化にせよ何にせよ、法改正は後手に回るばかり。現場の声を先取りする政界に変えたい」と転進動機を語る。

県庁在職中は環境分野の担当が多く、代表的仕事は旧明野村（現北杜市）、旧中道町（現甲府市）での廃棄物処理・処分施設立地問題。ともに現場に足を運び、反対住民と対話することが欠かせなかった。「政治が遠いなと強く思ったのはこのころ。廃棄物関連の法律が実情に追い付いていなかった」と振り返る。

現在仕えるのは衆院山梨1区選出の赤池誠章代議士。事務所の秘書室長の肩書を持つ。県在職中、代議士と面識もなかったが、定年退職を控えた今年1月、知人を介して政策秘書就任を打診された。「現場主義を貫こう」という代議士の勧誘に共感。議員からの申請を受け認定される政策秘書として翌2月、衆院事務局に認定された。

政策秘書の役割は「優先されるべき政策の論理を構成すること」と話す。「以前は確かに、大物政治家に頼んで公共事業を配分してもらって『ばらまき政治』があった。しかし、財政難で時代は変わった。大物がいくら言っても付かない予算は付かない。現場の窮状を肌でつかみ、政策の必要性を説明する力が、政治に何より必要になった」と力説する。

過度の車社会を変えようと、商工会議所と組んで甲府市での次世代路面電車（LR T）敷設に向けた政策提言を準備中。「隣接市を含めても甲府は人口30万人強。この程度の人口ではLR Tは採算に乗らないと言われるが、車を運転できなくなる年齢は誰にもやって来る。病院は赤字でも官がかかわるように、地域交通も赤字だからこそ、やらないといけない」と訴える。

完全休養日は不定期で、1日だけの週もある激務。「知事秘書の経験もあるし、秘書がどういう仕事かは分かっていたから」と苦しめていない。

（2006年9月26日配信） 【i JAMP「クローズアップ」より】